未来へ伝えていく
遺産群の価値

神宿る島

宗像・沖ノ島と
関連遺産群

古代東アジアにおける海を越えた交流――
その舞台となった海域の「神宿る島」と人々との関わりが、
沖ノ島を信仰の対象とする文化的伝統を育んだ。

千数百年間、島では祭祀遺跡が
膨大な数の奉献品とともに手つかずで残されてきた。
五百年間に及ぶ対外交流と
自然崇拝に基づく古代祭祀の遷り変わりを伝えている。

人々の間にはやがて三柱の女神に対する信仰が生まれ、
島を守ってきた禁忌を保ちながら
海の安全を願う古代からの信仰が現代に継承されている。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、
こうした信仰の文化的伝統の形成と継承の過程を物語る
世界でも例をみない稀有な物証である。

神宿る島　宗像・沖ノ島と関連遺産群
第2版　平成28年2月
［発 行］「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
（事務局）福岡県世界遺産登録推進室
〒812-8577　福岡市博多区東公園7-7　TEL：092-643-3162
http://www.okinoshima-heritage.jp/

© 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
編集協力／一般社団法人 九州のムラ　　デザイン／永田修平
印刷／ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社

祭祀の変遷と対外交流の証

沖ノ島と古代祭祀

日本列島と朝鮮半島との間に位置する沖ノ島は、高度な航海技術をもった宗像地域の人々の信仰の対象であった。古代東アジアにおいて海を越えた交流が頻繁に行われた四～九世紀の約五百年間にわたり、沖ノ島では航海の安全を祈っておびただしい量の貴重な奉献品を用いた祭祀が行われた。

島全体が信仰の対象である沖ノ島では、厳しく入島を制限する禁忌などの慣習が人々の間に根付き、自然崇拝に基づく古代祭祀の変遷を示す遺跡がほぼ手つかずの状態で現代まで受け継がれてきた。

沖ノ島は周囲約4km、最高所の標高は243m。標高80～90mにある巨岩群を中心に、22箇所の古代祭祀遺跡が残されている。手前の小屋島、御門柱、天狗岩の三つの岩礁は、沖ノ島に対する鳥居の役割を果たしている。

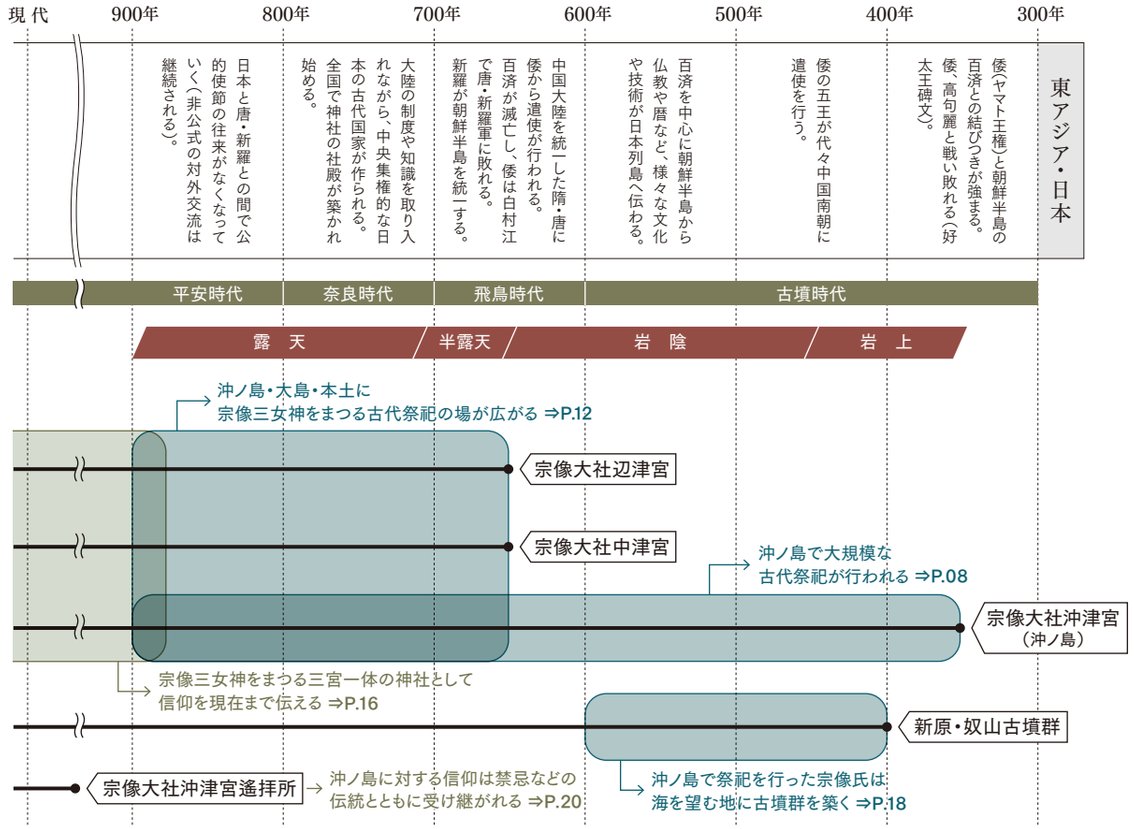
古代東アジアの交流の中で

航海の安全を祈って

4世紀後半、倭（ヤマト王権）と朝鮮半島の百済との交流が活発化したことを契機として、日本列島と朝鮮半島との間の海域に位置する孤島、沖ノ島の巨岩群周辺で航海の安全と交流の成就を祈る大規模な祭祀が行われるようになった。古代東アジアにおける対外交流が活発に展開した9世紀末にかけて、祭祀は連綿と続けられた。

この海域では、航海術に長けた宗像地域の人々が海を越えた交流に大きな役割を果たし、やがて沖ノ島を含む三か所で宗像三女神に対する祭祀が行われるようになっていく。大陸から古代日本にもたらされた新たな文化や優れた品々は、政治や社会、信仰などあらゆる面の発展に貢献し、宗像三女神は古代国家にとって非常に重要な航路の守り神として位置づけられた。

沖ノ島はその後も「神宿る島」とされ、古代祭祀遺跡はほぼ手つかずの状態で現代に伝えられた。発掘調査の結果、約五百年にわたる自然崇拝を基盤とした祭祀の変遷が確認されている。祭祀の場は巨岩の上に始まり、巨岩の陰、そして露天の平坦地へと移行し、宗像三女神に対する信仰はその間に形成されていく。また希少な舶載品をはじめとする神への奉献品にも、並行して様々な変化がある。古代における祭祀の変遷や各時期の対外交流のあり方を証明するものとして、発見された約8万点の奉献品全てが国宝に指定されている。



※付随する岩礁（小屋島・御門柱・天狗岩）を含む。

岩上祭祀

17号遺跡。21面もの多数の鏡を積み重ね、岩の間に納めた状況が確認された。右はその内の一枚（方格規矩鏡）。

4世紀後半、対外交流の活発化を背景に巨岩の上で祭祀が始まった。岩と岩とが重なる狭いすき間に、丁寧に奉献品が並べ置かれていた。祭祀に用いられた品は、銅鏡や鉄剣などの武具、勾玉などの玉類を中心とし、当時の古墳に副葬された品々と共通する。ただし、鏡・剣・玉の組み合わせは日本神話にみえる「三種の神器」と一致しているように、最も古い時期の奉献品であっても後世まで長く祭祀で用いられるものがみられる。

5世紀中頃には、巨岩の上の大石を石で方形に囲った祭壇が設けられるようになる。ヤマト王権が朝鮮半島から調達した鉄素材が捧げられたことは、当時の対外交流をよく反映している。

5世紀後半になると、祭祀の場は庇（ひさし）のように突き出た巨岩の陰へと遷り変わる。この岩陰祭祀の奉献品には、鉄製武器や刀子・斧などのミニチュア製品、装飾性の高い金銅製の馬具などがある。これらは当時の最高の技術で作られた、朝鮮半島からもたらされた品々を含む。特に金製指輪は新羅の王陵から出土した指輪と酷似し、重要な交流の証である。また、遥かシルクロードを経てもたらされたとみられるイラン製のカットグラス碗片も発見されている。危険な海を越えて対外交流を行なった古代の人々は、これらの貴重な品々を供え、神に祈りを捧げたのである。

21号遺跡。中央の大石に神を降臨させた祭壇とみられる遺構が調査によって発見され、復元された。

千数百年の時を超え 古代祭祀の様子が現れた

巨岩の右が7号遺跡、左が8号遺跡。金製指輪や金銅製馬具など、新羅製とみられる貴重な品々が多く見つかった。

岩陰祭祀

3.

1.

4.

2.

1. 金製指輪　2. 金銅製帯金具　3. 金銅製棘葉形杏葉　4. 金銅製心葉形杏葉
2〜4 は馬具。1 も含め全て新羅からもたらされた品とされる。

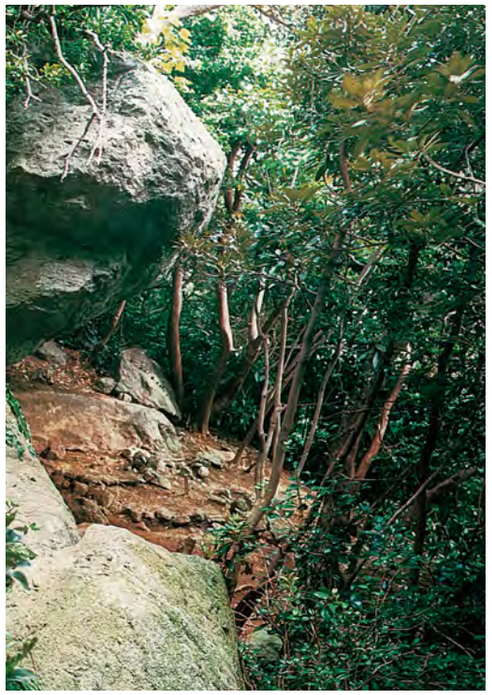
※奉献品は全て宗像大社神宝館所蔵。

激動の東アジアの中でみられる祭祀の変容

7世紀に入り岩陰祭祀の終り頃になると、奉献品に明確な変化がみられるようになる。金銅製の紡織具や人形などは、従来のように古墳の副葬品とは共通しない。7世紀後半、祭祀はわずかな岩陰と大部分の露天との両所にまたがって行われるようになるが（半岩陰・半露天祭祀）、金銅製の紡織具や琴、祭祀用の土器など、祭祀のために作られた奉献品が目立つ。

この時期、東アジアでは長い分裂状態にあった中国大陸を隋が統一し、代わった唐も周辺に勢威を振るった。ヤマト王権は両王朝に遣使を行い交流に努めたが、長らく友好関係にあった百済が滅ぼされると、六六三年に唐・新羅軍と刃を交え、大敗。以後、唐を手本とした中央集権国家の確立に全力を傾けていく。半岩陰・半露天祭祀遺跡からは、中国伝来の非常に珍しい品々が見つかっている。高度な技術・文化をもつ国を目指してはるばる日本から海を渡り、持ち帰った品が沖ノ島に捧げられたのだろう。

沖ノ島の祭祀は、そのような激動の東アジア情勢と国家の改革の中で変化を遂げたものと考えられている。この時期に登場した新たな祭祀は、その後現在まで続く日本固有の信仰における祭祀の基盤となった。上記の金銅製品などは、現代も用いられている伊勢神宮の神宝と共通する。日本の古代祭祀の詳しい内容については、文字による記録が残る8世紀以降の様子しか分からない。それ以前の様子を伝える沖ノ島祭祀遺跡は、日本固有の信仰の形成過程を考える上で欠かせない存在なのである。



22号遺跡。石組みによる祭壇が設けられ、岩陰の外にも須恵器が並べられていた。

22号遺跡。石囲いの中に多数の金銅製の紡織具などが埋納され、新たな祭祀の出現をうかがわせる。

半岩陰・半露天祭祀

1.

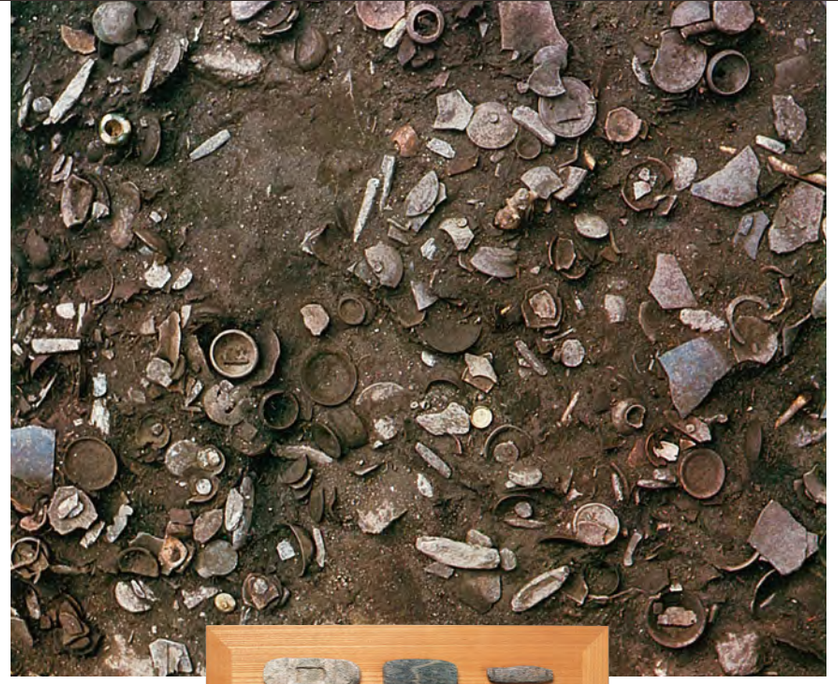
2.

3.

1.金銅製龍頭　2.唐三彩長頸瓶片（口縁部）
3.金銅製雛形五弦琴
1・2は中国からもたらされたとされるもの。琴は古くから祭祀で用いられ、3は伊勢神宮の神宝と一致する。

5号遺跡。調査では、祭祀で土器が実際に並べられた様子が判明した。

露天祭祀



1.

3.

2.

1.1号遺跡（沖ノ島）。大量の土器類などが現在も残されている。　2.奈良三彩小壺。唐三彩の技術をもとに日本で作られた。　3.滑石製舟形

自然崇拝から人格神が登場した

8世紀になると、巨岩群からやや離れた露天の平坦地で祭祀が行われるようになる。大石を中心とする祭壇状の石積遺構の周辺には、大量の奉献品が残されていた。9世紀末頃まで約200年間にわたり、継続的に祭祀が行われたとみられる。奉献品は、穴を開けられた祭祀用のものを含む多種多様な土師器・須恵器や、人形・馬形・舟形などの滑石製形代などを主体とする。これらは新たな時代の祭祀の特色をもつ一方で、宗像地域独特の形状や材質で製作されている。古代国家の新たな体制の下で、地域の伝統を残した祭祀が行われていたのだろう。

宗像地域では、7世紀後半までに大島の御嶽山祭祀遺跡、九州本土の下高宮祭祀遺跡でも、沖ノ島での祭祀と共通性をもった露天祭祀が行われるようになった。一方、8世紀前半に成立した日本最古の歴史書である『古事記』『日本書紀』には、宗像地域の人々が沖津宮・中津宮・辺津宮で宗像三女神をまつっていると記されている。沖ノ島が沖津宮、大島の御嶽山が中津宮、本土の下高宮が辺津宮に該当し、宗像地域の人々によって三女神に対する祭祀が行われるようになったことは明らかである。

沖ノ島に対する自然崇拝から宗像三女神という人格をもつ神に対する信仰が現れ、両者は併存しながら、以後の宗像地域の信仰の基盤となった。本遺産群は、こうした過程を確かな物証によって理解できる点で、世界でも他に例をみない存在と言える。

大島の御嶽山祭祀遺跡。沖ノ島の奉献品と共通する滑石製の舟形が出土した。

宗像三女神に対する海を越えた三つの祭祀の場

20世紀に露天祭祀の場として整備された高宮祭場。
この下にも古代の下高宮祭祀遺跡が眠っている。

宗像地域の生きた伝統

宗像三女神と信仰の継承

7世紀後半には沖ノ島と共通する祭祀が大島の中津宮や本土の辺津宮でも行われるようになり、海によって結ばれる広大な空間で宗像三女神をまつる宗像大社が成立する。沖ノ島に対する信仰の伝統は、宗像三女神信仰として現代に継承されている。

対外交流の担い手として祭祀を行い、現在も続く信仰の伝統を育んだ宗像氏の物証が、5～6世紀に本土から沖ノ島へと続く海を望む台地上に築かれた新原・奴山古墳群である。そして、大島に設けられた沖津宮遙拝所は、禁忌によって守られてきた沖ノ島を遙拝する伝統を示している。

大きく入海が広がっていた宗像地域の人々は海とともに栄え、ほぼ一直線上に並ぶ露天祭祀の場は三宮からなる宗像大社となった。通常渡島できない沖ノ島に対し、後に大島には沖津宮遙拝所が設けられる。

イラスト／北野陽子

宗像大社三宮

古代祭祀の場を起源として 現代まで続く信仰の場

1.

2.

3.

1.古代祭祀遺跡が営まれた巨岩群の間に築かれた沖津宮社殿。
2.大島の御嶽山の麓、海に面した高台に位置する中津宮社殿。
3.宗像大社の神事において、中心的な役割を担ってきた本土の辺津宮社殿。

『筑前国続風土記附録』の「大島図」。18世紀頃の大島を描いたもので、御嶽山山頂と中津宮社殿とを結ぶ参道が描かれている。北岸には沖津宮遙拝所、海の向こうには沖ノ島も描かれる。（平岡家所蔵）

社殿を伴う信仰の場として

宗像大社は、約60キロに及ぶ広大な空間に展開する沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、九州本土の辺津宮という三つの宮からなる神社である。それぞれが古代祭祀遺跡を起源として、現代まで続く宗像三女神をまつる信仰の場である。このような信仰のあり方は、古代にその原型が形成され、社殿を主な祭祀の場として現代まで継承されてきた。

沖ノ島では、古代祭祀終了後しばらくは社殿がなかったようだが、17世紀半ばまでに、古代祭祀の場であった巨岩群の間に沖津宮の社殿が築かれた。全島が沖津宮の境内とされ、17世紀までは人も常駐せず、島そのものが信仰の対象であり続けた。現在は、宗像大社の神職1名が10日交代で島に常駐し、毎日社殿で神事を行なっている。

大島の中津宮では、山頂で古代祭祀が行われた御嶽山の麓に、16世紀までに社殿が設けられた。社殿と御嶽山山頂とは参道で結ばれ、一体となった中津宮の境内を形成している。

辺津宮では、丘陵上に位置する下高宮祭祀遺跡の麓に、遅くとも12世紀までには社殿が設けられた。辺津宮は古代に入海だった釣川沿いに位置し、海や川との関わりの深い三女神をまつる本土の信仰の場として、宗像大社の神事の中心となっていった。

信仰の伝統を育んできた人々

海と一体的な空間の中で

沖ノ島の古代祭祀は、高度な航海技術をもった古代豪族宗像氏が対外交流に従事する中で行われたものである。古代国家による祭祀への関与のもと、彼らはやがて宗像大社の三つの宮において宗像三女神をまつるようになった。

現代まで続く沖ノ島に対する信仰の伝統を築いた宗像氏の存在を示す物証が、5〜6世紀に築かれた新原・奴山古墳群である。宗像地域は、かつて大きく入海が広がっていた九州本土と、沖ノ島との間に位置する大島などによって、海と一体的な空間を形成している。新原・奴山古墳群はかつて入海だった農地に面し、本土から沖ノ島へと続く海を見渡すことができる台地上に、前方後円墳や円墳、方墳など、大小様々な墳丘が密集して築かれている。対外交流の舞台となった海に生き、沖ノ島に対する信仰を担い育んだ宗像地域の古代豪族のあり方を最もよく示している。

宗像三女神信仰は、現在に至るまでこの宗像地域の人々によって受け継がれている。特に漁業者たちの沖ノ島に対する信仰は篤く、長く島を守ってきたという自負を持ち、豊漁や海の安全などを願っている。三女神は年に一度のみあれ祭において、漁船の大船団によって辺津宮に揃う。これは中世の神事を復興して行われているもので、宗像地域における現代の宗像三女神信仰を象徴している。

みあれ祭海上神幸。宗像七浦の漁船数百隻により、大島から本土の神湊（こうのみなと）で待つ市杵島姫神のもとへ、田心姫神と湍津姫神が迎えられる。

古代から海とともに生きてきた宗像地域の人々

みあれ祭陸上神幸。辺津宮に三女神が揃い、宗像大社最大の神事である秋季大祭が行われる。

写真／吉村靖徳

周囲の地形を含め、良好な保存状態を保つ新原・奴山古墳群。海の向こうには大島が見え、その海は沖ノ島へと続いてゆく。

遥拝と禁忌

沖津宮遙拝所。沖ノ島からは48キロ離れており、空気の澄んだ日には沖ノ島の島影を見ることができる。

沖ノ島を守ってきた信仰の伝統

沖ノ島の古代祭祀遺跡や豊かな自然は、その地理的要因に加え、島の神聖性を守るための厳重な禁忌など、信仰に基づく伝統によって、ほとんど人の手が加えられることなく維持されてきた。古代から続く沖ノ島への信仰は、現在に至るまで生き続けているのである。

18世紀までに大島の北岸に設けられた沖津宮遙拝所は、普段は立ち入ることのできない沖ノ島を遥か遠くに拝むための信仰の場である。その社殿は、島そのものをご神体とする沖ノ島に対する拝殿の役割を果たしている。

古代祭祀が行われなくなった後は、盛んな対外交易を行って栄えた宗像大宮司家が信仰を守り、大宮司家が断絶した16世紀末以降は、神職や地域の人々がその信仰を支えていった。沖ノ島周辺では宗像地域の人々によって漁業が行われ、17世紀からは境界海域の警戒のための見張りが島に駐在した。しかし、それらの人々は沖ノ島を「神宿る島」として、みだりに入島することや物を持ち出すことなどに対する厳格な禁忌を守っていた。ほかにも女人禁制や島内で四足の動物を食べてはいけないなどの禁忌が、現在に至るまで受け継がれている。現在、5月27日の沖津宮現地大祭は、一般男性が約２００名に限り沖ノ島に渡って参拝することのできる唯一の機会となっているが、この時も禁忌は厳格に守られている。

― 沖ノ島の禁忌 ―

「不言様（おいわずさま）」

沖ノ島で見たり聞いたりしたものは一切口外してはならず、人々は沖ノ島を「不言様」「不言島」とも呼び、畏敬の念をもって現代まで守り伝えてきた。

「一木一草一石たりとも持ち出してはならない」

沖ノ島からは一切何も持ち出してはならないとされ、江戸時代にはこれを破ったことにより祟りがあったという伝承がある。そのため、沖ノ島の古代祭祀遺跡はほぼ手つかずの状態で守られてきた。

「上陸前の禊（みそぎ）」

沖ノ島へ上陸することは通常認められていない。上陸を許された場合や、日々奉祀を行っている神職であっても、必ず始めに着衣を全て脱いで海に浸かり心身を清めなければ、島内へ入ることは許されない。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

「世界遺産」登録を目指して

世界遺産とは、国や民族を越えて人類が共有するべき「顕著な普遍的価値」をもつものとして、世界遺産条約に基づいたユネスコの世界遺産リストに記載された資産です。「文化遺産」と「自然遺産」、その両方を兼ね備えた「複合遺産」の3種類があり、「顕著な普遍的価値」をもつかどうかは、ユネスコ世界遺産委員会が定める評価基準に該当するかどうかで判断されます。

2016年に世界遺産に推薦された本遺産群は、次頁のように三つの評価基準に該当するものとして、2017年の世界遺産登録を目指しています。

宗像大社沖津宮（沖ノ島）

活発な対外交流を背景とする4〜9世紀の古代祭祀遺跡が禁忌とともに現代まで守り伝えられてきた、「神宿る島」と岩礁からなる信仰の場

新原・奴山古墳群

沖ノ島で祭祀を行い、今に続く島に対する信仰の伝統を育んだ宗像氏の物証

宗像大社沖津宮遙拝所

通常渡島できない沖ノ島を遥拝する生きた伝統を伝える、大島における信仰の場

宗像大社辺津宮

沖ノ島から展開した7〜9世紀の古代祭祀遺跡を起源とする、九州本土における信仰の場

宗像大社中津宮

沖ノ島から展開した7〜9世紀の古代祭祀遺跡を起源とする、大島における信仰の場

本遺産群の価値

評価基準（iii）

ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する稀有な物証

本遺産群は、「神宿る島」を崇拝する文化的伝統が古代から今日まで発展し継承されてきたことを物語る稀有な物証である。千五百年以上にわたり神聖な島とされてきた沖ノ島では、四世紀から約五百年間におよぶ古代祭祀の変遷をほぼ手つかずの状態で伝える考古遺跡が守り伝えられてきた。自然崇拝を基盤として航海の安全を祈る祭祀は、宗像三女神をまつる宗像大社の三つの宮における祭祀へと発展し、それぞれが信仰の場として今に続いている。新原・奴山古墳群は信仰の文化的伝統を築いた宗像氏の存在の物証であり、沖津宮遙拝所が大島に設けられるなど、禁忌や遥拝といった島に対する信仰の伝統は宗像地域の人々の間で現在まで継承されている。

評価基準（ii）

ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すもの

本遺産群は、沖ノ島で始まった古代祭祀の変遷により、四世紀から九世紀の東アジアにおける価値観の交流を示す。宗像地域の人々は航海の危険を乗り越えて交流に大きな役割を果たした。大陸からの新たな文化や優れた品々は、古代日本の政治や社会、信仰などあらゆる面の発展に貢献した。国家にとって非常に重要な交流の航路の守り神として、沖ノ島には当時の先進技術で作られた重要な舶載品が数多く奉献され、活発な対外交流の実態を反映する。

評価基準（vi）

顕著な普遍的意義を有する生きた伝統、思想、信仰などとの実質的関連

本遺産群は、海上の安全を願う生きた伝統との明白な関連がある。沖ノ島への信仰は、航海や漁業といった海上活動に伴う危険への対応から生まれたものであり、厳しく入島を制限する禁忌など、信仰の伝統は今も宗像地域の人々の生活に息づいている。沖ノ島に対する信仰は古事記・日本書紀に登場する宗像三女神信仰へと発展し、日本固有の信仰の形成の一段階を示す。宗像三女神は水上での安全などを司る神として、現在も日本全国で広くまつられている。